Malignant trichilemmoma

23

Malignant trichilemmoma の1例

滝野 長平* 車地 祐子*

Summary

85歳女子の下腿に生じた malignant trichilemmoma の1例を報告した。病理組織学的に外毛根鞘腫様変化が先行し、この部の一部にボーエン病様変化が生じたものと推測された。またこの変化の波及が段階的に進行することが窺われる所見も得られた。臨床的に下腿発生の点について日皮会誌により本邦例で検討したが、下腿発生病例は28例中1例と少く性別は男性であった。また先行が疑われる外毛根鞘腫の発生部位についても同様に検討したが、19例中2例でともに男性であった。女性における下腿発生はきわめてまれといえるが、いまだ報告例は少く、今後の課題として検討すべきことを述べた。

緒 言

毛包の悪性腫瘍は最近その症例の報告が増加の傾向を示しているが、いまだまれな疾患に属している。森岡¹⁾は毛包癌について2型、すなわち malignant trichilemmoma と malignant proliferating epidermoid cyst をあげている。われわれは前者に相当すると思われる症例を経験する機会を得たので報告する。

症 例

患者：85歳，女

初 診：昭和60年1月26日

家族歴：特記することなし

既往歴：昭和39年胆嚢炎。昭和53年12月に脳卒中。その後左半身麻痺を生じ自宅療養。この間仙骨部に褥瘡を生じている。

現病歴：5年ほど前清拭時家族により右下腿

外側の皮疹に気づかれるが、正確な発症時期は不明。3ヵ月前から易出血性となり、増大も目立ってきた。なお当時患者は高血圧症・尿路感染症などのため当院内科に入院中であつたため、受持医からの依頼で往診した。

現 症：腫瘍は右下腿外側上部の2×1.5 cm ボタンを伏せたように扁平に軽く隆起する類円形・境界鮮明な結節で、表面は紅色調・粗大顆粒状・一部に痂皮・鮮紅色肉芽面が混在するなど多彩で、易出血性である（図1）。弾性硬に

図 1.

* Chohei TAKINO, Yuko KURUMAJI: 九段
坂病院皮膚科

図 2.

図 4.

図 3.

触れるが周囲に浸潤なく自覚症もない。なお所属リンパ節は触知されない。

治療および経過

単純に切除。術後の経過は順調で、現在のところ再発はない。

病理組織学的所見

腫瘍部分の全般的な組織構築をみると、病変の主体は上向性に増殖する表皮層で、表皮索は舌状あるいはさらに幅広で不規則な型に肥大し連続性に並んでみられる。これら肥大した表皮索の中心部は概して明るく見える細胞で占められ、また部位によっては大小の類円形の空隙がみられる。真皮上層には稠密な小円形細胞浸潤を認めるが、基底膜の破壊はごく一部を除きみられない(図 2, 3)。これら表皮病変部を子細にみると、ボーエン病様変化を合併する部分と合併のみられない部分とがみられる。ボーエン病様変化の顕著な部(図 4)では、その全域にわたり多数の clumping cell を含む巨細胞のほ

か、細胞個角化・細胞分裂像などがみられる。同部の全体的な組織構築はかなり乱れてはいるが、最外層に基底細胞様細胞、それより内側に好酸性の目立つ細胞、ついで胞体の明調化した細胞の 3 層構造の存在が窺われ、さらにその内側の一部に顆粒層を介さない角質部分をみるところもある。そのほか細胞壊死によると思われる類円形の空隙が混在している。腫瘍部表面の角層は錯角化を示す。なおこの部でも腫瘍細胞が基底膜を破って真皮内に浸潤する像はみられない。次にボーエン病様変化がごく一部に認められる部分(図 5)では、病変部は舌状に肥大した表皮索で、全般的に組織構築の乱れは少く、最外層は柵状構造は判然としないが基底細胞様細胞、中心に向かって胞体の好酸性・明調化細胞へと移行し、角化は表面で錯角化としてみられ、外毛根鞘腫の外側の一部にボーエン病様変化を合併したかのごとくみえる。最後にボーエン病様変化の合併がみられない部は残りの

図 5.

図 6.

すべてであるが、組織構築の乱れの程度は種々ではあるが異型性はなく、外毛根鞘腫を思わせる部分が多い(図6, 7)。またこれらに混じて顆粒層を介する顕著な表皮性角化を示す部分もみられるが、それらとの境界は明瞭である(図7)。特殊染色では主として明調細胞に豊富なグリコーゲンの存在を認めた。空隙内の壊死細胞の周囲はアルジャン・ブルー染色陽性を呈し全体として網状に染色されてみられた。なお同部はPAS染色陰性を示した。メラニンは周囲健全部では基底層に増強をみたが、外毛根鞘腫様部分ではblockade melanocyteが散見される程度で、ボーエン病様変化部ではこれもほとんど認められなかった。

考 察

自験例の概要は以上のごとくであるが、病理組織学上の要点は連続性に横に連なる外毛根鞘腫様構築で、かつ同部のみに一部ではあるがボーエン病様変化を認めたことである。したがって本例は森岡¹⁾の malignant trichilemmoma の典型としてよいものとする。しかし発症部

図 7.

位の下腿は外毛根鞘腫としての好発部位²⁾ではないので検討を加えると、ちなみに日皮会誌における報告例において部位の記載のあるものは昭和59年までに19例を数えるが、下腿例は2例でいずれも男性である³⁾。一方, malignant trichilemmoma あるいはこれに準じるものは28例であったが、下腿例は1例で男性であった⁴⁾。このように例数は少いが類似例がみられている。この部の女性例としてははじめてのようではあるが、これは報告例の少いことに基因する

と推測される。なお自験例において認められたボーエン病様変化の階段的波及が窺われる所見は興味深いものと考えるが、併せて今後の検討課題としたい。

文 献

- 1) 森岡貞雄：毛包腫瘍展望. 日皮会誌, 92: 1215-1221, 昭57.
- 2) Brownstein, M.H. & Shapiro, L.: Trichilemmoma, Analysis of 40 new cases, Arch. Dermatol., 107: 866-869, 1973.
- 3) 奥田長三郎, 岡 吉郎, 今井清治: Trichilemmoma の4例. 日皮会誌, 93: 787-888, 昭58. 55.
- 4) 福田金寿, 斎藤一義, 田嶋公子, 池田重雄: Malignant trichilemmoma, 日皮会誌, 90: 200, 昭55.